

2021年横浜ナザレン教会・復活節第六主日礼拝説教
「変貌」

ルカによる福音書第9章28節から36節

【聖書】

ルカによる福音書 **6:28** この話をしてから八日ほどたったとき、イエスは、ペトロ、ヨハネ、およびヤコブを連れて、祈るために山に登られた。**29** 祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた。**30** 見ると、二人の人がイエスと語り合っていた。モーセとエリヤである。**31** 二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた。**32** ペトロと仲間は、ひどく眠かったが、じっとこらえていると、栄光に輝くイエスと、そばに立っている二人の人が見えた。**33** その二人がイエスから離れようとしたとき、ペトロがイエスに言った。「先生、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」ペトロは、自分でも何を言っているのか、分からなかったのである。**34** ペトロがこう言っていると、雲が現れて彼らを覆った。彼らが雲の中に包まれていくので、弟子たちは恐れた。**35** すると、「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」と言う声が雲の中から聞こえた。**36** その声がしたとき、そこにはイエスだけがおられた。弟子たちは沈黙を守り、見たことを当時だれにも話さなかった。

I

今朝、私どもの礼拝に与えられたのは、有名な「山上の変貌の話」というものです。主イエスが、ペトロとヨハネとヤコブという三人のお弟子を連れて、祈るために、山にお登りになりました。すると、そこに、もう死んだ筈の、モーセとエリヤが現れ、主と話をしているうちに、主のみ顔が、光輝くようになった。ペトロが、非常に感動して、この三人のために小屋をつくり、永遠にここに一緒にいたい、と言い出したほどです。気が付くと、モーセとエリヤはいなくなり、神のみ声が聞こえてきて、「これはわたしの子、私の選んだ者、これに聞け」と言われた、というのです。まことに美しい話です。ですが、罪人に伝道するために、毎日のように埃にまみれ歩き回っておられた主イエスのみ姿とは大きく違います。どう説明してよいか分からないほどです。ただ、信仰の目をもってみれば、普段は疲れ果てているようにも見える主イエスのお姿も、光がさすように見えるかも知れません。ことに、祈っておられる主を見たペトロたちには、おそらく、他の人たちの伺い知れないような感銘があり、主のご様子が変わって見えたとしても、不思議はないでしょう。ペトロの第二の手紙にも、この事が書いています。「わたしたちの主イエス・キリストの力に満ちた来臨を知

らせるのに、わたしたちは巧みな作り話を用いたわけではありません。わたしたちは、キリストの威光を目撃したのです。荘厳な栄光の中から、『これはわたしの愛する子。わたしの心に適う者』というような声があって、主イエスは父である神から誉れと栄光をお受けになりました。わたしたちは、聖なる山にイエスといたとき、天から響いてきたこの声を聞いたのです。」(ペトロの手紙Ⅱ 1:16-18)。これは、ペトロの第二の手紙の中に書いてあって、いかにも、ペトロが書いたようになっていますが、今日の大部分の聖書学者は、ペトロが直接書いたのではなく、誰かがその当時の習慣に従い、大使徒ペトロの名を用いて書いたものであろう、と言っています。しかし、そうであるとしても、ペトロが、この不思議なことを見た、というのは、早くから教会の中で、知られていたと判ります。そして、教会の人々は、それを疑うことはなかったようです。何故なら、自分達が、信仰によって知っている主イエスに、このようなことがあったとしても、別に怪しむ必要はない、と考えたからでありましょう。

主イエスは、祈るために、高い山に登られたのです。主は、毎日のように、祈られたらしいのですが、山が近くにあれば、大抵は、山に登って祈られたようです。これは、世俗的な生活から離れ、静かに祈りたいと思われたからでありましょう。しかし、それだけでない、旧約以来、神の示しを受ける者は、よく山に登りました。例えば、モーセは律法と戒めが書かれた石の板を頂く時、神の命令によって、ホレブの山、別名シナイ山に登りました(出エ24:12-18)。そこで、主の栄光を見たのです。また、エリヤも、神のみ声を聞くという有名な経験をした時、やはり、神の導きによってホレブの山に行きました。(列上19:8-18)聖書では神とお会いする時、山に登るようです。主イエスもそうでありました。主は、この世ならぬ神に対して祈っておられたからです。雲は、聖書では神がご自身を現すこと、また、ご自分を隠される事を示すものです。神に祈り、神の御旨があらわれた時に、その雲が輝きとなることも、訝しむ必要はないのです。

Ⅱ

さて、聖書を読む時には、いつでも、前後の関係を、よく知らねばなりません。この話のすぐ前には、フィリポ・カイサリアという地方での話を書いてあります。主イエスが、そのフィリポ・カイサリアで、弟子たちに「人々は私を誰と言っているか」と聞かれました。弟子たちは「人々は、先生のことをエリヤの再来と言ったり、バプテスマのヨハネの生まれ変わりだ、と言っています」と答えます。すると主は「それなら、お前たちは、私を誰と思うのか」と聞かれました。すると、ペトロが「あなたこそ、キリスト、即ち救い主です」と答えました。それに続いて、主イエスは、ご自分がやがて捕らえられ、十字架につけられ、三

日目に甦る、という預言をされました。主イエスが、ご自身は救い主であることを承認され、更に苦難と復活について語られたことは、驚くべきことです。それは、弟子たちが考えていた救い主、人々が期待していた人物とは、全く違ったものでした。復活に終わるとはいえ、「主が殺される」ということは、容易に信じられないことでした。ペトロが、「そんなことがあっては、大変です」と言って引きとめ、主から「**悪魔(サタン)、引き下がれ**」と叱りつけられたのも不思議ではない、と思います。

そのような人の反発に対して、変貌の山の記事は、何を語っているのか？ それは、主イエスが十字架と復活の救い主であることを神ご自身が承認されたという事を示しているのです。苦難と死という、悲惨な道を迎えられる主の道が誤っていないことを、神ご自身がはっきりお告げになったのが、この話です。神は「**これはわたしの子、わたしの選んだ者である**」と言われました。これは、主の十字架と復活の預言に対する、最高の承認です。十字架の死を語る主イエスを、神は、「**これこそ、わたしの選んだ者である**」と言われたからです。こうして、主の決意は、光り輝くばかりのこと、となったのです。主イエスは、地上では、まことに惨めな道をたどられました。その終わりは、苦しみと死、です。しかし、そのことが、神の最もお喜びになることであり、神がこれを良しとされるのです。その為に、今、神のご栄光が主イエスに飾られ、神の喜びのしるしとされたのです。

主イエスに対する神の御心は、旧約の預言者が、早くから伝えておりました。それが、先ほど共に読み交わしました、イザヤ書第42章の言葉です。42章は、「**見よ、私の僕、私が支える者を。／わたしが選び、喜び迎える者を。**」という言葉で始まっています。これは、この山の上で神が主イエスに対して言われた言葉を指し示すものでしょう。主は、生まれながら、神の御子でした。しかし、人間から見れば、多くの人のうちから神が選び出した者のように見えたでしょう。しかも、主はただ一人、ご自分の使命とするところに、立ち向かわれたように見えました。ですが、主は、神が支持しておられたのです。その使命も、その道も、神が支えておられたもので、神と全く一つの想いで、使命である神のみ業を果たされたのです。主は、神の霊を受け、全ての国の人に、救いの道を与えられるのです。

しかも、この選ばれた救い主は、どのようにして救いを行われたのでしょうか。イザヤは言います。「**彼は叫ぶことなく、声をあげることなく、その声を巷に聞こえさせず**」です。救い主と自ら言う者は、大声でわめく人です。しかし、実は、大声で叫ぶ者を、人は救い主とは信じません。では、叫びもしないのに、どうして、人々は、救い主に惹きつけられるのでしょうか。それは、救い主が「**傷ついた葦を折ることなく、暗くなっていく灯心を消すことなく**」と言われるように、

まことに、弱い者、捨てられた者、つまり、全ての罪ある者の味方だからです。華々しい救い主は、救いと言っても、結局は、強い者の救い主であって、傷ついた葦やほの暗い灯心にも似た無力な者を救う事は後回し。しかも、弱い者を救う者は、しばしば真実に立つことが難しい。判官贔屓をしてしまう。にも拘らず、この救い主は、そのうちに真実を持ち、神の義の道を指し示します。困難を極める救い主の道を歩みながら、彼は衰えることもなく、落胆もせず、遂には救いを全うし、すべての人々の願に答えるのです。これは、救い主キリストの独自の姿を描いたものでしょう。この山の上で、神が、承認されたのは、このような救い主でした。それは、苦難を告げ、栄光をもって来る、人の子としての救い主の業が神に喜ばれるしるしでした。

III

さて、主イエスが祈っておられるうちに、み顔の様子が変わりました。衣が、まばゆいほど白く輝き、三人の弟子たちは、驚いてしまいます。すると、そこに、モーセとエリヤが現れ、主と話をしたのです。そのうちに、ペトロたちは眠くてたまらなくなります。原語では、「ぐっすり」と眠り込んだ」とあります。栄光の姿をとった主イエスと、他の二人は、尚、はなしを続けていましたが、やがて、二人は去って行きそうに見えました。そこで目を覚ましたペトロ、この情景の美しさに感動し、三人のために、「小屋をつくりたい」といいたしたのです。ペトロの気持ちは、誰にでも、よく判ることです。この世のものとも思えない様子を、そのまま残しておきたい、と思うのは、当然なこと。では、ペトロが「残しておきたい」と思ったものとは、いったい何であったのでしょうか。

ペトロは、目の前にある、主の栄光を留めておきたかったのでありましょう。しかし、主の栄光は、どうしたら、留めることができるのでしょうか。小屋を建てたら、いいのでしょうか。そういう方法で、この栄光を保っておくことができるのでしょうか。しかし、それを知るためには、主の栄光とは何か、を考えてみなければならぬでしょう。

ペトロ達が見たものは、主がモーセとエリヤと共に語られるという事でした。モーセは、言うまでもなく、律法を表します。エリヤは、預言者の代表。すると、この三人が語っているのは、メシアである主イエスを中心にして、律法と預言とが語り合う、という事です。律法と預言というのは、旧約聖書の事です。従って、律法と預言とが主と語る事は、旧約聖書に照らして、主のみ業を見るという事になりましょう。更に、主イエスを新約聖書の内容とすれば、ここでは、旧約と新約が語り合う事になります。ですから、ここに示されたものは、主イエスを中心とした全聖書の内容であった、という事になります。

それは何か？この三人の対話を具体的に見て行きたいと思えます。ルカ

は、それをはっきりと書いています。「栄光の中に現れて、イエスがエルサレムで遂げようとしている最後のことについて話していたのである」(9:31)がそれです。最後のこと、という単語は、直訳すれば「出て行くこと」。それは、勿論、「この世から出て行く」、「死」を指します。その一方、「最後」と訳された単語そのものが、同時に、「出エジプト記」を示す言葉でもあります。これは、非常に興味深いことです。彼らは、主がこの世から出て行かれる事、主の最後について語っていました。主の最後、即ち十字架こそは、我々罪人にとっての出エジプトだ、解放であり、救いだということです。つまり、福音です。主イエスとモーセ、エリヤ、つまり全聖書は、十字架と復活によってもたらされる我々の救いを語っている、福音を語っている、とこの場面は告げています。ですから、ここに現れた主の栄光とは、何よりも、福音の栄光です。神に背いた人間に対して、神が御子を遣わして、救いの業を完成された事です。これ以上に輝かしいことはありません。神のみ業として、驚くべきことであるだけでなく、人間にとっても輝くばかりに、喜ばしい出来事です。それが、今、山の上の主イエスの変貌という形で我々に示されたのです。

IV

神が、御子の救いのみ業を承認されたことは、全てのものにとって、まことに大いなる事です。しかし、「神が承認される」とは、果たしてどういう事なのでしょう。御子の業が、神の承認なしに行われる事もないことでしょうか。改めて、神が承認される事の意味はどこにあるのでしょうか。

ドイツの聖書学者が、この事を説明して、「**苦しみを受け死に給うたメシアは、その本来あるべき最後の場所を、神の栄光の中に持っている**」と申しました。少し硬い言い方ですが、その意味は、「メシアは苦しみにあい、死ぬのであるが、遂には、必ず神の栄光を受ける」ということです。ここに、神が御子のご受難について、承認を与えられた事の意味があるのです。

救いを受けた人間にとって、大きな問題のひとつは、この救いは完成されるかどうか、という事です。我々は、自分が不信仰な為に、しょっちゅう、自分の救いの確かさについて、心配します。「自分は、本当に救われているのか」と思ったり、「この救いで大丈夫か」と考えたりする。それは、主の救いについて、確信を持っていないからでしょう。何が、救いを確かにしているかが、分かっていないからです。救い主を、お遣わし下さったのは、神です。ですから、救いの保証をしてくださるのも、神なのです。つまり、神が、み子の救いの業を、山上の変貌という形で承認されたのは、我々の救いの完成を約束されたという事です。我々の救いに対する自信のなさ、救いが神によって完成されることを忘れて、自分の熱心さによって決まる、と考えているからです。だ

から、自分の気持ちがぐらつくと、主の救いも不確かなもののように思うのです。しかし、我々の救いは、神が始め、神が完成されるもの。キリストの復活も、聖書は、キリストが復活させられた、と言って、甦らせるのは神であることをはっきりと示しています。十字架の救いを完成されるのも神なら、それを我々の中に確かな救いとしてくださるのも、神。「あなたがたのうちに良いわざを始められたかたが、キリスト・イエスの日までにそれを完成してくださるにちがいない」(フィリピ1:6)と言うのが、パウロの確信でしたし、我々の望みでもあります。神が、キリストの御業を「良し」とみられた、という今日の聖書テキストの出来事は、我々、主の救いによって生きる者に力強い励ましを与えてくれるのです。

従って、この山上の変貌の出来事は、主の復活のしるしである、と言ってもいいのです。それは、主のみ姿が白く輝いた事が、主の復活の時のご様子に似ているから、というだけではありません。主の救いが完成するのは復活からです。主の苦難を正しい、神の御心に叶うものと認める事は、神がキリストを死人のうちから甦らせて、その救いを完成されるという事においてです。ですから、この山上の出来事は、復活による救いの完成がやがて来る、という事を予告していることとなります。主は、苦難について預言された時にも、三日の後に甦るべきことを告げられました。神は、この山の上でそれを承認され、この不思議な方法であらかじめ弟子達に、我々に告げられたのです。

その事から、すぐに考えられることは、復活とともに、救いを完成する、もう一つのこと、再臨です。十字架の救いは、復活によって成就される、この事については何の間違いもないのです。しかし、救いを神のご計画から考えてみますと、救いの一切が終わるのは、再臨でありましょう。その点から言えば、この山上の出来事が、主が栄光に包まれ再び来られる再臨を暗示している、と言っても差し支えないのです。

ペトロは、慌てて三つの小屋を造り、栄光に輝く主を留めおきたい、と思いましたが。しかし、この栄光がつなぎとめられるものではない事は、言うまでもありません。主の栄光を地上で輝かせるのは、主の十字架と復活を中心とする、神の御業に対する信仰による他ないからです。

V

では、我々はどうしたらよいのか？ルカはこの事もきちんと記しています。神は最後に雲の中から「これはわたしの子」と言われましたが、その終わりに、「これに聞け」と告げられました。これに聞け、は、聞いて従え、ということです。また、「これだけに聞け」ということです。イエス・キリストこそ、神の御子である

と知って、このお方にだけに聞き、そのみ声に従いなさい、という事です。そうする事こそ、十字架と復活の主の栄光、福音の栄光を地上に於いて輝かせる事だから。その為に、神は驚くべき方法で、我々罪人の救い、福音の栄光を保証され、ご自分の意志を我々に伝えられたのです。このような道を開いてくださった神に感謝し、賛美せずにはおられません。

※この説教は、イエス伝講解説教集「わが主よ、わが神よ」（竹森満佐一、ヨルダン社）におさめられた説教「変貌」を下地としたものです。